

2014年11月7日

## 青年の憂い、熟年の開眼、老年の哀歓

**手帳と直感と手書き**

店頭に来年の手帳が出揃いました。種類も豊富になりコーナーもかなりなスペースです。でも、なかなか決め手には欠けます。手帳単体でもそうなのに、手帳カバーに合わせるとなると、これまた至難。けっさよく落ち着くのはごくごくシンプルな中身。

七年前のたまたま見つけたアシユフオードの手帳。重厚感があって、デザインも気がきいていて、それ以来アシユフオードを愛用、大中小そろ

え、目的に忘れて使われています。仕事の打ち合わせ、スケジュール、日記、メモ。これらを一緒にすると、重く、大きく、かさばります。

だからこそデジタル、いえないやぱりペーパーが使い勝手がいい。スケジュールは半分が一覧できる四つ折のもの、日記は縦書き。直感的に思いついたことをメモするのに、デジタルな画面に目をやり「打つ」という手の動きがどうもそぐない。そんな感覚です。

デジタルとアナログ、何事もバランスよく。

秋深まり、立冬。そろそろ今年一年をふりかえり、新しい年の計を思案する季節。その程度は違って、誰もが繰り返してきている習わし。もちろんこの季節以外でも、人により、世代により。

社会に出たものの違和感をめぐえない青年の憂い。人の羨む世界も自分にとってはあまり意味を感じない。意味を感じる世界は別にある。そちらへ行こうか、行って暮らしていけるだろうか。人生の選択を誤るのではないか。



小さな波もそこそこありながら、充実した壮年期を過ごして‘終わり’が見え始めた熟年の開眼。はたしてこれでいいのだろうか。終わっていいのだろうか。自分の軸がないのではないか。

戦中を生きぬき、戦後を闊歩し、過ぎてみれば思うように生きてきた老年の哀歓。体の衰えはかなしく、精神の高みは誇らしく、最期を指おり数えながら、浮世で

奔走する現役たちを後押しする。

老年からみる青年の憂いは愛おしく、青年からみる熟年の開眼はまぶしく、熟年からみる老年の哀歓は見栄えよく、青年には荒野を、熟年には新地を勧める。

老年にはまだ間がありますが、青年の憂いに、『自分の考えている、それをカタチにしていきなさい、大丈夫、ちゃんと生きていけるから』と、いつになく力をこめて断言。

「自分の軸がない」ともらした熟年

には、悠々自適な生活に安住するだけではおさまらない持って生まれた性質を見ました。青年の憂いが持ち越して現れたような。

まもなく2015年。1995年から20年、これまでの社会の変化とこれから20年の変化。青年の憂いは、手をかえ品をかえ、深まりそうです。熟年の段階で、青年たちのよい後押しをしたいものですね。

## 2014年今年のニュースから

新聞社では「今年のニュース」の準備も進んでいるでしょう。その中に入るか入らないか、個人的には興味深いのは「人工知能」です。今年がよく記事になりました。今後30年の間に社会に広く浸透する予想です。ということは2045年ごろ。



「機械にできることは機械に、人間はもっと高度な仕事を」とよく言われますが、高度というのは、人工知能に対すると、曖昧な状況や現象や言動を見てとり、読み取り、適切に判断・反応できることでしょうか。原始の力、野性の復権？

LEE'S リーズ  
<http://www.leeslee.com>  
 〒530-0012  
 大阪市北区芝田2丁目8-15  
 北梅田ビル35号  
 リー・ヤマネ・清実